

造形 Journal

造形ジャーナル 図工、美術指導の可能性を広げる情報誌

Vol. 56-3

通巻413号

2011

CONTENTS

アート・エッセイ

歯がゆい傍観／米谷清和

特集／

未来へつなげる造形教育

第3回 授業をつくる

美術教育の役割／柴田和豊 — 2

造形教育のあり方とその「授業デザイン」／

佐々木達行 — 6

図工室・美術室

子どもの椅子／大野誠 — 10

図工室から世界の天空へ／松野一也 — 10

美術室から飛び出そう／橋本幸枝 — 11

教材研究

ピリーとおさんぼ／木口恵子 — 12

あふれる想い、私の視点／安藤栄信 — 14

地域のアート

藤井達吉現代美術館と碧南市の美術教育／土生和彦 — 16

造形ピックアップ

佐賀を、そして日本を元気にする造形活動／富永千晶 — 17

造形プラザ

公開授業、展覧会案内 — 17

開隆堂

ART ESSAY

アート★エッセイ

「歯がゆい傍観」

米谷 清和
(日本画家)



久しぶりに画材を買ったついでに渋谷の街を歩いてみた。こんな場所あったっけ、この前は何だっただろうと思いつけない実に曖昧な記憶。

私が上京したのは東急本店ができて間もない頃だった。玉川電鉄はまだ路上を走っていた。新玉川線は、今では地下を走り、東急文化会館跡地には高層ビルが建設中である。これから東急東横店が取り壊され、副都心線と東横線が直結するらしい。渋谷駅の顔が変わる。現実の変貌はテレビで見ているより激しい。

私は日頃、都市の日常をテーマに描いている。若い頃の主な取材場所は身近な渋谷の街だった。ホームの一角を巨大な黒いコンクリートのかたまりの高速道路が覆っている。駅から続く人が歩くだけで揺れる長い歩道橋の真下には、車の往来の激しい国道246号線、トラックが通るたびにもっと揺れる。朝夕にその長い歩道橋を急ぐ通勤の人々を遠くから眺めて、まるで巡礼の列のようだと思った。公衆電話をかけている人たちの姿を見て、それぞれの見えない相手との会話をその表情から推測していた。

よく似たポーズをして並んで電話をかけている人たちは全くの無関係、人が替わって同じ光景が繰り返される。携帯電話の普及でその光景を今はもう見ることがない。

好んで雑踏に紛れることもあった。見知らぬ人の背中に行き先を委ね流されながら、孤独というより安堵を覚えたり人の温もりを肌で感じたりしていた。孤独の中の関係、反構成の構成、非関係の関係、求めていたのは便利と危険が隣り合わせ、慣れと無意識に潜む社会への警鐘だったかもしれない。それでもお互いそれぞれに生きている人の温もりを感じていたのだろう。

2011年3月11日の東日本大震災。テレビは、押し寄せる津波でスローモーションのように家が流されてゆく様子を映していた。交通、通信機能が麻痺するなかを歩いて家路へ向かう人の波。今までに見たことのない光景にただ呆然としていた。あれから半年、社会の常識、価値観が変わり始めている。未だに傍観者でしかないことに恥じながら、私の中でも何かが変わりだし蠢いている。

(よねたに きよかず)



「夕暮れの雨」190×200cm、1992年

特集

未来へつなげる造形教育

第3回

授業をつくる

確かな授業づくりから始めよう

ある中学校の美術教師から聞いた話である。同じ美術を受けもっている他校の先生方に授業を公開し研究協議に臨むのは何でもないが、自分の学校にいる他教科の先生方に授業を公開して質疑応答や意見交換をするのは怖いぐらい緊張するそうだ。美術の活動内容はわかってもらえても、美術の学習内容についてうまく説明し、理解してもらうことは難しく、他教科の先生方からの鋭い質問や問題点などの厳しい指摘に対して明快な受け答えができなかったことが今でも忘れられず悔しかったという。その反面、他教科の先生方と研究協議を通して切磋琢磨した経験は、その後の美術教師としての力を磨く上で大いに役立ったと話していた。

我が国の「授業研究」は、世界に誇れる効果的な指導力向上方策の一つと言われている。授業者は、深い教材研究に裏打ちされた効果的な題材開発と、目の前の子どもたちの的確な実態把握に基づく綿密な指導計画のもと、適切な材料や用具を準備して授業に臨む。参観者は、授業者が作成した学習指導案を手にも、さまざまな観点で授業を観察しながら効果的な指導方法を探る。授業後、授業者と参観者の活発な質疑応答や意見交換を通して、焦点化した内容について協議を深めていく。こうした「授業研究」は今後も大事にしたい学校文化である。

今日、美術教師が激減していく時代を迎えている。美術教師のつながりの中での「授業研究」にも限界がある。そうであるならば、勤務校の同僚である他教科の教師を相手とする校内での「授業研究」に積極的に名乗りをあげてはどうだろうか。他流試合的な緊張感と同僚相手の安心感の中、確かな授業づくりに大きな効果が期待できるはずだ。

造形教育にかかわる確かな授業づくりが、豊かな未来をつくっていくと信じている。

美術教育の役割

～大震災から学んだこと～

東京学芸大学 柴田 和豊

1. はじめに

社会にそれほど問題がないときは、教育の未来について、自然と楽天的な言説が多くなる。新しく開発されたIT技術が、人間の能力をどのように広げ、新たな学習のスタイルをどう創出していくか、というような未来論的な提言を私たちはよく耳にしてきた。巨視的に見て、近代工業化の延長線上に現代社会もある以上、技術革新の洗練、充実が社会を良き方向へ導くという考えに賛同する人たちは多い。

けれども、今年3月の東日本大震災以降、私たちの間には大きな変化が見られる。地震や津波によって思い知らされたことは、人間と自然との関係は変わることなく原始的なものであり、少々の近代化では何も根本的に変わりはないということであった。このような認識を迫られるとき、未来への語り口は楽天的な未来論的なものではありえなくなる。「命あってこそ」という思いは、新しい技術を介在させて広がる自分ではなく、「いまここにいる自分」、言いかえると存在の原点へと人々の視線を導かずにはおかない。未来を思い描くことは、自分がおかれている状況と向かい合うことから始まっていくのである。

2. 震災後に見られる教育の見方の変化

ここ数年来の教育動向の中心は、ゆとり教育路線の修正にあったと言える。

児童・生徒が内蔵するものと学習への自発性を重視しようとしたゆとり教育は、学習を緩くし、そのために学力を低下させるものであったと言われる。そしてその反動として、あらためて知識・技術の理解・習得を重視する教育指向が顕在化してきたのは、周知のところだろう。

また、教員養成のカリキュラムに目を向けても、関連する変化が認められる。ゆとり時代の中核的科目として「プロジェクト学習」と、それに連動

する「総合演習」があったが、それらは「教職実践演習」という科目に取って代わられている。前者は、各教科個別の知識内容を超えてさまざまな知識や技術が生まれるベースを広い視野で考えることを通して、教育を多様に考えてみるよう促すものであった。他方後者は、学校を中心としたいわゆる「教育現実」により多く関わることを目指すものとなっている。その背景には総合学習に向けられた「漠然とした学習に陥りかねない」という批判が控えていることは想像に難くない。批判者たちは教育への多様な視線よりも、確実な視点を求めているのである。

それに対し、大震災からの復活の模索の中から、違う動きが見えてきている。街や村の復興には多視点的な視座が求められるのであり、教育においても社会のことを総合的な視点で考える取り組みが欠かせないことが、以前にも増して指摘されるようになってきている。街のあり方を考えるには、歴史、地理、産業、仕事、交通、デザインなどについて複合的に視野に入れておかねばならないのである。

皮肉なことだが、否定的に捉えられることの多かったプロジェクト学習科目は、そのようなことを多面的に考えようとするものであった。例をあげると、「多摩(東京西部)の自然条件と産業の関連を考える」「地域探索から考える環境教育プログラム」「持続可能な社会づくりのための都市と農村の比較研究」などのテーマが掲げられていた。それらは復興活動のベースへと発展しうる素地をそなえた学習であったと言える。

このようなゆとり教育否定以後のねじれを見てみると、教育は各教科の領分に規定されるのではなく、人びとの生きる現実に応答しようとするリアルな感性によって構想されねばならないことが分かってくる。教育の基盤は、人間そのものと、その人間が生きる時代や社会の核心を考えようとする姿勢を欠いては、表面的なものにならざるを

得ないのである。

3. 美術教育の基軸をどう考えるか

上のように記してくると、美術教育の未来を構想するのが億劫になるかもしれない。図工や美術は色彩や形体の事柄に関わる時間だとすると、問題が大きく膨らみすぎているようにも思えるからである。

そのような戸惑いに対しては、子どもたちをはじめとする人間の特質をもう一度考えることから始めるのがよいと思っている。大震災を通して私たちは生身の人間のかけがえのなさを心に焼きつけた。しかし、その大切さは震災によって初めて気づかされたものでもない。これまでもさまざまな形で人間の深部に関わり、その可能性を伸ばそうとしてきた。だとすると、これまでの活動を振り返り、それらの妥当性を問い直すことから、展望は開けるはずである。

そのため何より押えておくべきは、造形活動が人間と重層的に関わりをもつことだろう。結論を先にいうと、感覚・感情・意識という広がりでの表現活動の諸層を把握することができると思う。その広がりには人間存在の全体をカバーするものと言ってよい。

以下に、少し順序が入れ替わるが三つの柱について概括していこう。

4. 普遍的な課題としての感情の表現

近代の公教育制度とともに始まる美術教育は、教育政策的に「役に立つもの・実利的なもの」という性格を与えられる。しかし、それに対抗するものとして、「絵を通して子どもたちが感じていること、思っていることが見えてくる」というような、人間理解の視点に立った考えが大きくなっていくのは周知の通りである。

近代以降の美術を見ても、ゴッホやアンリ・ルソー、青木繁や関根正二らの作品は「人には表さずにはいられないものがある」ということを教えてくれる。そこでの主役は趣味人の美術におけるような洗練されたスタイルや様式ではなく、誰もが抱える生きることへのさまざまな思いであった。そして、それらを表すことへの共感、現在に至るまで変わることなく引き継がれている。

子どもたちも同様に、うれしいこと、辛いこと、好きなことなどをさまざまに表してきた。それに

よって、自分をうまく保つことができるのだし、大人にとっても子どもたちを理解するための糸口になることを私たちは知っている。第2次大戦の後に再出発する美術教育の原点を象徴的に表したのものとして、映画『絵を描く子どもたち』(羽仁進)と小説『裸の王様』(開高健)があるが、それらも、表現する主体である子どもたちの内に生じる心理的な起伏に主眼をおいている。造形活動は、子どもたちの内なる世界を引き出す力を秘めているのである。一般的な言い方をすれば、戦後の美術教育は子どもたちが自分の世界や感情を表現することに重きをおいてきたと言ってよい。

ところで、そのような考え方に近年変化が生じていたことに触れておかねばならない。自己の表現に傾斜した戦後・20世紀後半の美術教育は、子どもたちの主観中心的な行動を助長すると同時に、造形・美術文化の学習をおろそかにしてきたとの批判が、ゆとり教育への批判と連動して強まってきた。自分の中のないものを学習によって得ることで、人間は成長していく。造形活動に関しても、いろいろなテーマ、表現技術や素材、それらを育んだ歴史、日常生活への活かし方などがあり、学ぶべきことは多い。自分を中心におく美術教育は、そのような学習の機会を制限するものとして批判されるのである。

だが、ここでも注目すべきは、大震災がもたらした状況の変化がこのような動きの対極にある考え方をあらためて前面に押し出していることである。胸の内を描くことによって癒されること、あるいはそのように方向づけることがなくても、自ずと自分の深部に目が向くことを、さまざまなボランティア活動は再認識させてくれる。「命あってこそ」という思いは、自分に目を向けること、自分の気持ちを表すことへと、人々を向かわさずにはおかない。

5. 感覚的世界への関心の高まり

感情や気持ちを表すことは近代以来の中心的テーマであったが、昨今の動向は、胸の内よりもっと表層に近いところにも大きな関心を示すようになってきている。表現は人間の奥底から立ち現れる。だが表現する主体のありようを考えると、表現以前の感覚・感性の問題にも関心は向かう。造形遊びをめぐってよく耳にする「五感を通して」という言葉は、そのことを明示している。ただし、五

感は比喩的な言い方に近く、造形活動における感覚の拡大は「触覚」が軸になる。

手で、体で触ること、すなわち人間の内部への入り口としての皮膚レベルで進行する「感じること」の大切さは広く意識されている。小学校の図画工作科に目をやると、教科のベースになっていると言ってよいほどである。伝統的な粘土を用いた活動から、戸外に出てザラザラやヌルヌル、ツルツルやフワフワというような感触の自然物や人工物を集め、並べてみるというような、従来のものづくりとは異なる活動まで、その幅は広い。それらの背景には、いろいろな素材や材料、環境に肌で触れ、直接的に感じ取ることを通して、子どもたちの感覚や感受性を柔軟に開いていくことが、成長にとって何より大切であるという、人間の知恵が息づいている。

生死が示すように、人間は原始からの生物的特性に規定されて生きる生き物である。新鮮な水と酸素、心地よい温度、光などを必要とすることには変わりはない。教育においては、子どもたちの身体の中に蓄えられた人間の良き特性を引き出して伸ばしていくことこそが、大切な課題となる。土をこね、木を削り、紙を折り、色を塗ったりするような営みは高度に発達した科学技術の時代に即応していないという人たちもいる。しかし、それらは人間の原点を思い起こさせるからこそ、なくてはならないものなのである。

6. 自分の外への眼差し

自分自身がどれだけ自分独自のものによってつくり上げられているかについては、多くの人が心もとなく思っているかもしれない。「人の影響を受けやすい」という自己分析があるように、私たちは人との関わりの中で世界をつくっていく。さらに、テレビやインターネットがもたらす情報や世界イメージの多種多様さを考えると、自分の中のどれだけ自分のオリジナルか分からなくなる。だからこそ、主体的に生きることを支える取り組みが求められる。

美術教育においても人と人の関わり、人と社会との関わりを視野においた、自分の外に向かおうとする活動への関心は低くない。戦後の前半期には、身のまわりの世界を見つめ、生きていく上で大切なことを気づかせようとする「生活画」の実践があった。あるいはいつの時代でも、ポスター

づくりのように、自分たちの考えや活動を発信するための学習が大切にされてきた。さらに近年、人々が心地よく暮らすことのできる環境を生活デザイン視点から考えようとする試みや、子どもたちに投げかけられる大量の視覚的情報への関わり方を考えようとするメディア・リテラシーなどへの関心も高まっている。

私たちは、日々関わりをもつものを独自の形で受けとめ、「こうするほうがよい」あるいは「このように過ごしていきたい」などというように自分の考えを示そうとする。美術教育もまたそのような課題に関わりうるのであり、人の生き方の問題に触れることのできる奥行きをそなえている。

7. 授業例～ 小学校教員養成のための授業から

大学で、小学校の教師を目指す人たちへの授業の最初には、人間の原始性に触れる活動をおくことにしている。理想は泥んこ遊びや、戸外で自然と触れる中での表現活動だが、学習環境と時間数を考えて内容をスケールダウンしている。入り口は紙粘土づくりと、その粘土を使っての「自分の好きなもの」づくりである。授業回数としては2～3回を想定している。

材料はトイレットペーパー、一般的な文具糊(ほんとうは小麦粉を炊いて自製したい)、場合によっては若干の水、それに後で彩色するためのアクリルカラー。作業はまず適当な大きさ・細かさに紙をちぎり、それに糊を加えて混ぜ、1時間ほどもんでいく。途中で困ってしまう者もいれば、すんなりと滑らかな粘土を生み出す者もいる。全体に共通しているのは、手のひらでもみ続ける中で、クチャクチャ、ネチャネチャの感触を濃密に感じることである。そこにはけっして他の教科では遭遇することのない「単純な世界」が広がっている。おもしろさを感じ、打ち込んでいる者もいれば、あきれ戸惑っている者もいる。後者の人たちには「人間の中には進化する部分と、そうでない進化を拒む部分があり、このような作業は馬鹿にできない」と話すことにしている。

第2段階は、自分でこねた粘土を材料に、好きなものをつくり、色を塗っていく。内容的な制限はない。そのことから、1回目と違って、安堵感のようなものが流れる。小学1～2年生で取り上げられることの多い題材に「すきなものをかく」

があるが、よく知っているものを描いたり、ついたりすることは、たのしむことに浸れるのがよい。大学生も同じである。つくり出されるものは、マグロやエビの握り、餃子や枝豆、ハートや星、へびやマキウチなど、実にいろいろある。鮮やかに彩色されたそれらは、ごくありふれたものであるからこそ、つくり・表す奥深い世界に続く入り口として期待できると思う。



8. 複合的な授業内容の工夫

美術教育の多面的な性格と、小学校の図画工作や中学校での美術の授業時数を同時に考えると、気分は暗くなる。多くの内容を盛り込む余地はないほどまでに削られている。そのために、入り口は簡単で奥行きは深いという教材の開発が求められる。造形的学習、感覚的体験、感情表出、時代と社会への思考などが重なり合うような内容を組み上げることができれば、美術教育の課題意識の広がりに沿った実践が可能となる。

私はここ数年、「メッセージ・バッジ」という題材を授業で試行している。内容は、大きく見て造形的学習と伝達内容の2側面をもつ。まずバッジであるから、胸につけることが可能なように、大きくても15cm以内の大きさ、厚み3cm位までを骨格的な基本条件とする。次に円・三角形・四角形が必ず一つは入ったデザインにするという条件をつける。それらを満たしていれば、幾何学的でも、不定形のものでも、その他でも、何の制限もない。そしてメッセージ・バッジである以上、伝えるべきメッセージを示さねばならない旨の確認をする。多難な時代であるからこそ、さまざまに発言したいことがあるはずであり、人を傷つけるものでなければ、メッセージにタブーはないことを伝える。学生たちは、上記の条件設定に基づいて、造形面での工夫とメッセージの検討を並行して進めていく。

試行状況としては、多くの愛らしい作品が生み出されており、悪くないと思っている。造形面ではさまざまな工夫が見られ、受験準備で創作活動と縁がなくなってしまった彼・彼女たちも、ほんとうは造形的作業が好きなのだと感じさせられることが多い。例えば、バッジの台紙に段ボールを使うにしても、段ボールをはいで波状のパターンを表に出したり、レースのような布を貼り込んで繊細な演出をするかと思うと、エアーキャップのブツブツを必要な形に切って配置した大胆な表現を展開するというようにである。

ただ、メッセージ面については、考えさせられることが多い。多難な時代を生きる大学生にしては単純であっさりし過ぎではないかと思うこともしばしばである。例えば、「元気?」「やあ!」「しばらく」というような挨拶もどきのものも少なくないし、第三者には分からないサークルの略称(イニシャル)のようなものも目につく。視線は、まだ差し障りのない内容と個人の関心の枠内に留まっているように思われる。当面の課題は、視線に普遍性と社会性がより現れるよう取り組みを深めていくことだろう。平和について、経済について、就職についてなど取り上げることは少なくないはずである。

とはいえ、つくり出された作品が示す愛らしさへの期待感はずいぶん小さい。ユーモアの中にシリアスな事柄を溶かし込んで伝えるというやり方を確立できれば、より多くの人たちとコミュニケーションしていく新たな道筋が開けると考えている。



(しばた かずとよ)

造形教育のあり方とその「授業デザイン」

～子どもの精神的、人間的な自立を促し、「生きる力」を培う～

千葉大学 佐々木 達行

1. はじめに

読者諸氏である先生方は、日々、図工・美術科の授業を行っていて、当然のように授業をつくり続けているはずですが、しかし、忙しさの中では、授業をつくることの意味や方法を考える余裕はないかもしれません。

当然、授業は、授業をつくること自体が目的ではありません。しかし、「どのような授業」を「どのような方法」でつくるのか、ということは授業を行う上で最も大切なことの一つです。本稿をそうしたことの意味や方法を改めて考えてみる機会にさせていただけたらと思うのです。

そこで、ここでは先に記した二つの視点から論を述べていくことにします。

一つ目は、「どのような授業」をつくるかを考えてみることです。それは、授業を通して、どのような子どもを教え、育てたいのか、授業をつくる意味や根拠として「育てたい子ども像」を考えることであり、具体的な「教育課題／目標」、「授業課題／目標」などを掲げることに他なりません。

ここでは、現代的な教育課題として掲げられている「生きる力」も含めて考えていきたいと思えます。それは、3月11日の大震災と造形教育の意味やそのあり方を考えるのに大切な文言と言えらるからです。

二つ目は、「どのような方法」で授業をつくるかということです。ここでは、授業の「デザイン方法」として考えていきます。

授業のデザイン方法は、掲げた「授業課題／目標」を達成するために、どのような方法が適切、かつ効果的であるかを「授業構成論」の視点から捉えたものです。

限られた紙面であるため、どちらもザックリとした論になるかと思いますが、未来につなげる造形教育のあり方とその「授業デザイン」についての提案です。

2. 授業をつくる意味や根拠となる「教育課題／目標」を考える

(1) 知識や技術を教え、子どもや国の経済的な自立を促す教育のあり方

日本は、物質的、経済的な豊かさを求め、それらを達成するためにさまざまな努力を重ねてきました。図工・美術科の教育もそうした国のあり方を担い、子どもに知識や技術を教えることを中心的な課題として教育は行われてきたのです。

これは、子どもに造形の知識や技術を教え、国の経済的な自立を促す教育のあり方です。これを「造形の教育」とします。それらの成功は、我が国の高度経済成長を促し、物質的な豊かさを享受する国をもたらしたのです。

その一方で、新たな課題も生まれてきました。「物質的な豊かさは、人を幸せにする」との仮説が崩れ始めたのです。つまり、物が豊かに溢れた環境であっても、人は必ずしも幸せになるとは限らない、という現実を見ることになったのです。

教育現場においては、校内暴力、いじめ、不登校、引きこもりが生じ、社会的にはニート、無差別殺人など、以前にはほとんど見られなかったような不幸な状況が出現してきています。物質的な豊かさと人としての豊かさや幸せ感とは、必ずしも相関関係にはないということです。

また、東日本を襲った巨大地震は、ひたすら豊かさを求め続けてきた人々の考え方や価値観を大きく揺るがすこととなります。特に、経済優先の象徴である原発の崩壊と放射線漏れを起こした事態は、日本の高度な科学技術やそれらに支えられていた安全神話が崩れたと言えるでしょう。

こうした日本のさまざまな厳しい状況を、どのように受け止め、どのように乗り越えていけばよいのでしょうか。まさに「生きる力」が求められているのです。

それでは、未来社会を築き、担っていく子どもには、どのような資質や能力が求められるでし

うか。義務教育は、そうした未来に向けた新たな課題をしっかりと受け止め、応えていかなければなりません。

義務教育としての図工・美術科教育も社会の新たな課題と対峙し、教科としての特徴を最大限に生かしながら、その責務を果たしていくことが求められているのです。

(2) 精神的、人間的な自立を促す、新たな教育のあり方

ある程度の経済的な自立を達成し、物質的な豊かさを享受している国が抱えているさまざまな課題を解決していくためには、どのような資質や能力が求められるのでしょうか。また、未来の成熟した社会を築き、担っていく子どもたちには、どのような「生きる力」を培えばよいのでしょうか。

物質的な豊かさを求め、子どもたちに造形の知識や技術を教え、経済的な自立を促す教育のあり方を「造形の教育」とすると先に述べました。それに対して、子どもの自主性や主体性を培いながら精神的、人間的な自立を促す教育のあり方に「造形を通じた教育」があります。

この「造形の教育」と「造形を通じた教育」の象徴的な違いは、「正答を求める教育」と「正答を求めることができない教育」のあり方ということができるでしょう。

知識や技術には正答があります。しかし、例えば「人の幸せ」には「正しい幸せ」というものではありません。それぞれが違った価値観をもとに、それぞれが感じるもので、他から幸せの押し売りはできないのです。

私は、「造形の教育」を「絶対的な価値観」を背景にした教育として捉え、一方の「造形を通じた教育」を「相対的な価値観」を背景にした教育と捉えています。

ところで、「教育」は「教」と「育」を組み合わせ「教える」と書きます。つまり、知識や技術は「教える」ものですが、それでは「育てる」は、どのようなものを指すのでしょうか。そこには「教える」ことができないものがあり、「育てる」に値するものがあるということです。それが、例えば、「幸せ感」ということになるのです。

また、「教える」ことはできないが、「育てる」べきものは他にもたくさんあります。例えば、子どもの興味や関心、積極性、選択力や決定力、発想力、構想力、思考力、判断力、追究力、総合力

など、自主性や主体性に関わることはすべて単純に教えることができない、育てる部分を多く含む能力であると言えます。さらに、創造性や情操、感性なども同様でしょう。

これはまさに、「生きる力」の多くを占めている大切な能力であると考えられます。そもそも極端な例を除いて、正しい「生きる力」というものがあるのでしょうか。

われわれの日常生活は、正答があるものごと以上に、正答がないものごとで溢れています。つまり、与えられた知識や情報をどのように捉え、活用するか、というような相対的な価値を処理することが多いのです。

新たな課題として、成熟した未来社会を築き、担う子どもたちに必要な資質や能力とは、「教える」ことができない、「育てる」能力が大変多く含まれていることに気づきます。

未来社会を築き、担う子どもたちを育てる教育には、「造形を通じた教育」のあり方を取り入れることの必然性が見えてきます。造形表現活動を通じ、例えば、興味や関心、積極性、選択力や決定力、判断力、追究力など、子どもの自主性や主体性を育てることが大切になります。

しかし、それでは知識や技術を教える「造形の教育」は不必要であるかということ、そうではありません。知識や技術を教えることも大切です。知識は一つの情報と捉えることもできます。情報、技術がなくては、造形表現活動はできないのです。

「造形を通じた教育」は「造形の教育」を包含した、ひとまわり大きな理念を掲げた人間教育のあり方であると私は捉えています。

義務教育としての図工・美術科のあり方は、「造形の知識や技術を教える教育」と「造形を通じた人間教育」との二者択一ではないということです。

(3) 未来社会を築き、担う子どもを育てる図工・美術科の「教育課題／目標」とは

私は、成熟した未来の社会では、人としての尊厳が認められていると同時に、すべての人が自らの生きる意味や価値を、あるいは主体と自立を追求しようとする存在でなければならないと考えています。人が生きる意味や価値は、初めから備わっているわけでもなく、自他や社会との関係の中に自らが見つけ、意味づけ、価値づけていかなければなりません。それには、そうしたこと自体を培うべき能力と捉える必要があるのです。

つまり、成熟した未来の社会は、尊厳と主体、自他の関係性、精神的、人間的な自立などを求めること自体が生きる基盤となり、それらが生きる力に転移すると捉えているのです。

それらを考察し、図工・美術科の「教育課題／目標」を次のように定義してみました。

「造形表現活動を通して、子どもに自主的、主体的、創造的に表現すること、生きることの意味や価値を問い、造形的なものの方や考え方、造形感覚や感性を培いながら、他との関係の中に「自分らしさ(Identity)」を求め、人間的な自立を促す。」

この「教育課題／目標」を分析すると、六つの「活動課題／目標」の項目として次のようにくくり、整理することができます。

- ①造形表現活動の快さやたのしさを経験し、心を開く。
- ②造形表現活動を通して相互理解、人間理解(コミュニケーション)を図る。
- ③「自分らしさ」を、あるいは造形的な課題を自主的、主体的、創造的に追究、発見したり、自己表現したりする力を培う。
- ④総合的な造形表現活動を経験し、造形的な総合力を養う。
- ⑤造形的なものの方や考え方、造形感覚を養い、感性を培う。
- ⑥造形的な知識や技能を養い、造形文化や歴史に興味や関心をもつ。

これらの「教育課題／目標」と「活動課題／目標」は、相対的な価値観をもとにした「育てる」課題を多く取り入れています。⑤と⑥が、「教える」要素が多い知識、技術的な課題となります。誌面は限られていますので、六つの「活動課題／目標」に対する具体的な「授業課題／目標」についての説明は省略します。

3. どのような方法で「授業デザイン」をするか

「どのような方法」で授業をつくるか、ここからは授業の「デザイン方法」を考えていきます。まず、授業の「デザイン方法」を考えるには、どのような授業をつくるか、つまり授業の「課題／目標」が明確に設定されていることが前提になります。

授業をつくることの意味や根拠は、子どもに「何を教え、育てるか」、つまり授業の「課題／目標」

にあるのです。授業で達成すべき「課題／目標」が変われば、それに合わせて授業のデザイン方法も変わらなければなりません。

(1)「教える」ことができない「課題／目標」は、授業でどのように「育てる」のか

授業で知識や技術は、言葉で伝えたり示範したりするなど指導することができます。

それでは授業で「教える」ことができない「課題／目標」、例えば、自主性や主体性を「育てる」には、どのようにしたらよいのでしょうか。

「教える」ことができないのですから、子どもたちが自主的、主体的に活動しなければならないような状況や環境を意図的に設定し、そこに子どもを追い込んでいくことになります。

授業のデザイン方法とは、極論すれば教師が巧みに設定する造形表現活動を行う状況や環境に子どもたちを追い込んでいく方法であると考えてもよいでしょう。

その状況や環境設定は、授業者の意図である「授業課題」と子どもが活動テーマを解決、追究できそうな範疇、つまり「子どもの実態」を考慮したものでなければなりません。易しすぎても難しすぎても「授業デザイン」としては不適切なのです。そこに授業の妥当性を見て取るのです。

それでは、次に具体的な授業の「デザイン方法」について考えていきましょう。

(2) 授業のデザイン方法

授業のデザイン方法には大きく分けて二つあります。

一つは「教師中心型」のデザイン方法で、「指示型」、「示範型」などと言われるものです。もう一つは、「児童・生徒中心型」のデザイン方法で、「課題追究型」や「問題解決型」、あるいは「総合型」などと言われるものです。

①「教師中心型」の授業のデザイン方法

「教師中心型」の授業とは義務教育で広く一般的に行われてきた「指示型」や「示範型」などのデザイン方法です。

これらは、知識や技術を短時間、多人数に合理的に教えるのに向いている方法といえます。この授業のデザイン方法は極めて単純、かつ明快でデザインがしやすいと言えます。それは「授業課題／目標」と「表現内容」とが背中合わせの関係にあるからです。

例えば、「絵画」の授業では、「描く技術を教

る」ということになります。つまり、「絵画」は、授業における「表現内容」の一つの要素である「表現形式」ということになります。一方、「描く技術を教える」は、造形の「知識や技術を教える」ということで、授業の「授業課題／目標」ということです。

授業の「表現内容／絵画形式」と「表現技術を教える課題／目標」は、背中合わせの関係にあります。

つまり、造形の「知識や技術」を教えることが授業の「課題／目標」である場合は、必然的に「教師中心型」のデザイン方法で授業を行うことが多くなるのです。また、この「教師中心型」の授業のデザイン方法は、極めて単純、明快で分かりやすく、絵が描ければ誰でも教えることができるとする所以です。

これらは、造形の知識や技術を教える「造形の教育」の典型的なデザイン方法とすることができます。

②「児童・生徒中心型」の授業のデザイン方法

「児童・生徒中心型の授業」とは、民主主義教育とともにもたらされた「問題解決型」、「課題追究型」、「総合型」と言われるようなデザイン方法です。これらは、子どもたちに課題としての活動テーマを与え、造形表現活動の試行錯誤を促し、自主性や主体性、自己決定力や選択力、追究力、総合力など、教えることができないような能力を育てることに向いているデザイン方法であると言えます。

これらのデザイン方法が多少なりとも理解されにくいのは、「授業課題／目標」と「表現内容」が単純につながっていないからです。「表現内容」は「授業課題／目標」を達成するための手段となり、どのような子どもを育てるのか、常に「授業課題／目標」と「表現内容」が吟味されなければならないからです。しかし、これらの授業のデザイン方法は、「造形を通じた教育」における中心的、かつ重要なデザイン方法であるのです。

それは、教えることができないような授業の「課題／目標」を、子どもの実態に合わせ、子ども自身が自主的、主体的に活動しなければならないような状況や環境を意図的に設定し、そこに追い込んでいく授業のデザイン方法であるからに他なりません。

未来社会を築き、担う子どもたちの精神的、人

間的な自立を促し、「生きる力」を培う教育を実現する切り札となり得る授業のデザイン方法であるとも言えるでしょう。

③「造形遊び」は、「児童・生徒中心型／課題追究型」のデザイン方法

前項で、「児童・生徒中心型」の授業のデザイン方法とその意味について述べましたが、図画工作科で行われている「造形遊び」は、児童を中心に据えた「課題追究型」の授業のデザイン方法です。つまり、表現材料を活動テーマに、子どもたちの造形表現活動を通じた試行錯誤を促していく授業ということになります。そこでは、子どもの自主性や主体性、自己選択力や決定力、追究力、総合力など、「教える」ことができないような能力を育てるため、それらを使わざるを得ない環境や状況を意図的に設定していくデザイン方法ということになります。

ですから、「造形遊び」は、子どもに知識や技術を教えて立派な作品をつくらせることを「授業課題／目標」に据えた授業ではありません。

造形表現として重要な要素である表現対象や主題、表現材料や形式、表現技術などを自主的、主体的に選んだり決めたり、追究したりするなどの能力を育てることを「授業課題／目標」に据えた授業ということになるのです。すなわち、造形表現活動における主体者を育てることになるのです。

4. おわりに

一つの教科が、日本の教育課題を一手に担うことはできません。また、図工・美術科として行う一つ一つの授業は、教育全体から俯瞰してみるとささやかな成果でしかないかもしれません。

しかし、成熟した未来社会に向け、図工・美術科として掲げる「造形を通じた教育」の「教育課題」とその「授業デザイン」のあり方は、必ず生きて働く力に転移すると考えられるのです。

未来社会をより豊かに生きるための「生きる力」とは、自他や社会、あるいは災害などと対峙、克服しようとするなど、自らの人生を自らがデザインしていくことに他ならないからです。

それは、まさに精神的、人間的な自立を追求することでもあるのです。(ささき たつゆき)

*参考文献：佐々木達行『造形教育における授業デザインと授業分析—授業構造とその構成要素から捉えた授業構成論—』東洋館出版社、2011

子どもの椅子

FROM

岩手県盛岡市立緑が丘小学校
大野 誠



大きな紙を使ったら…

絵をかいたり、ものをつくったりすることが大好きな2年生。手を存分に働かせながら自分なりの表現をたのしむ子どもたち。また、作品をつくりながら、友だちどうしの造形的な交流も見られるようになってきた。

授業で、新聞紙を主材料とし

て、体全体を使って材料と積極的にかかわりながら表現活動のたのしさを体感するねらいで、造形遊びを行った。

グループの真ん中に置かれたテーブルの上には、たくさんの広げた新聞紙が積まれてある。まずは一人一枚の新聞紙を自由

に手で触って、感じた特徴を伝え合う。「ざらざらしている。」「すぐにくしゃくしゃになって、やぶれそう。」「墨のようなにおいがするよ。」「子どもは思い思いに触った感じを伝え合う。

次は、新聞紙をただの大きな紙から形を変身させる方法を考えてみようとして投げかけた。新聞紙を自由に操作しながら形を変える方法を試しているうちに、すぐに造形的な交流が始まり、いろいろと試しながら、気づいたことを口々に伝え合っていた。

試す時間をつくった後、見つけた変身の仕方について発表させた。子どもたちから出された方法は、「折る」「丸める」「ねじる」「ちぎる」「包む」「はり合せ

る」など、実にさまざまだった。材料とのかかわりを深め、感覚を通して材料の特徴を感じ取った子どもたちであった。また、試す活動を通して、早速、こんなことをしてみたいといった、次の活動への見通しをもつ子どもも見られた。

「新聞紙を変身させながら、たのしいことを見つけてみよう。」と投げかけ、さまざまな操作を試みながら思いついたことを活動する時間である。新聞紙は何枚でも使ってよいこと、試す活動の中で見つけた操作を生かして、自分がやってみたいことを自由にやってみること、友だちと協力して取り組んでもよいこと、この3点を活動の視

点として与え、時間いっぱい自由に組み合わせた。「ねえ、新聞紙を丸めてみようよ。」「これを包んだら大きなキャンディーができるよ。」「新聞紙をつなげて大きな紙にしよう。」「服をつくってみよう。」「ねじって、どんどんつなげてみよう。」「子どもたちの表現活動は実に多様であり、友だちと一緒に活動しながら見つけたことを紹介し合い、どん

どん活動を広げていった。活動していくうちに、つくりたいものがイメージできて、形に上げていく子がいれば、ねじったり切ったりしたものをつなげていく子、活動そのものをたのしんでいる子もいて、体全体の感覚を働かせなが

ら表現をたのしむ児童の様子がうかがえた。

最後に、新聞紙の変身で見つけたたのしいことを紹介し合う発表会を行った。「やっているうちに、龍に見えてきた。」「ねじって丸めたら、マラカスに見えてきたので、次はかぶりものをつくって踊ってみたい。」など、試したことやできたことを紹介しながら、友だちと表現活動ができた喜びを感じていた。

(おおの まこと)



図工室

美術室

図工室から世界の大空へ

松野 一也(東京都八王子市立中野北小学校)

八王子の小さな学校の図工室。しかし、そこは、無限の可能性を秘めた子どもたちが、自由に活動するところ。全く自由にものを考え、発想したり、つくったり、過去や未来に思いをはせ、自分の考えや気持ちを伸び伸びと表すところ。

この小さな図工室で修行を重ね、いつかは世界を見つめ、地球規模でものを考える国際人として活躍できる人に育ててほしい、そして人間としての豊かな人生を送れるようになってほしい。また、自分の持っている力やよさを知り、それをさらに伸ばし、自分の存在に価値を見出すようになってくれることが私の願いです。

赴任したての今の学校も廊下・教室・掲示板などをさまざまに活用し、子どもたちの作品をたくさん紹介していこうと考えています。子どもたちの魅力的で、夢にあふれる作品がいっぱいの文化的な香りのする学校にしたいからです。

また、学校のホームページでも授業で制作した作品や、子どもたちが自分らしく造形活動をたのしんでいる様子をほぼ毎日紹介しています。家族や地域の方々からのリアルタイムな賞賛もあり、子どもたちはさらに意欲を高めています。

毎日の教材研究がたのしくてしかたありません。今までの中学校や海外での経験をもとに教材研究をすればするほど、子どもたちの瞳が輝いてくるのがうれしいです。

今後も目の前の子どもたちが生き生きするような授業をつくっていきたく思います。

(まつの かずや)



美術室から飛び出そう

橋本 幸枝(北海道岩見沢市立明成中学校)

「美術ってさ、何を教えているの?」と聞かれたときの言葉が忘れられません。「難しいことを教えているんじゃないのか」と思われたのでしょうか。私は、「いいえ、何も難しいことはやっていませんよ。ほかの教科と同じように学習時間を大事にしています。確かに、好き嫌いはあるかもしれませんが、それはどの教科も同じでしょう」と答えました。しかし、その時の会話は思ったように進みませんでした。そこから、私の気持ちの中で、「美術を見せるぞ&知らせるぞプロジェクト」が発動しました。鑑賞の場は日常の中にたくさ

んあります。とにかく多くの作品に触れ、見る機会をつくりました。授業で取り組んだ作品は、全て展示。平面は壁面に、立体は廊下に展示しました。当初は職場で多少戸惑われましたが、そこはあえて気づかないふりをして、とにかくどんどん展示しています。

子どもたちの作品だけではありません。指導資料の掛図や、道内で行われる美術展のチラシやポスターも、コーナーを作って知らせます。少しでも見て、触れて、感じてほしいとの思いからです。校内に美術の存在感を大きくアピールしたかったと

いうこともあります。

それらに丁寧な説明文をつけませんが、私の心の声は、見る人それぞれの感覚で受け取ってくれたようです。一つ一つ、うれしい反応、たのしい変化がありました。廊下に展示している前で、何人かで話しながら作品を見ている子どもたち。普段の授業では見られない姿を、子どもたちの作品から感じ取る教職員たち。展示から、学校中に美術の広がりを感じられました。美術は、美術室だけで行うのではなく、美術室から飛び出したっていいのだと思います。

(はしもと ゆきえ)



ビリーとおさんぽ

東京都足立区立千寿第八小学校 木口 恵子

1. はじめに

現任校で1年生の図工の授業を受けもって3年になる。東京都の小学校は図工専科を置いているが、低学年の図工は担任が受けもつ学校も多く、図工専科が1年生を指導する機会はさほど多くない。私も前任校では1年生を受けもっていませんでしたので、教科書や題材集を参考に、試行錯誤しながら日々の授業に向かっている。

題材を考えるときに、自分なりに気をつけていることが、

- ①材料とかわること、②形・色を意識すること、③想像力を生かすことの3点である。これらの三つの視点から教科書の題材を再構成した「題材」を紹介する。

2. 題材について

○題材名「ビリーとおさんぽ」(A表現(2))

第1学年対象・3時間扱い

○目標

- ・ちぎった紙の形から想像を広げ、組み合わせたりかき加えたりしながら、不思議な生き物をつくる。
- ・不思議な生き物の特徴や自分との関係について想像し、絵に表現する。

○材料・用具

黒・白の色画用紙(八つ切り)、クレヨン、のり、丸いシール(大きめのものと小さめのもの)、色画用紙(四つ切り)

○活動の流れ／*上記①～③の視点との関わり



(1) 活動について知り、意欲をもつ。

・紙をちぎった形から友だちのビリーをつくり、最後に自分とビリーがたのしんでいるところを絵に表すことを伝える。

(2) 紙をちぎったり並べたりしながら、ビリーの形を探す。

・「ビリーは生まれる時にビリッと音がします。」

八つ切りの画用紙を破いたりちぎったりする。

*一気に破いたり、少しずつ丁寧にちぎったり、いろいろな方向から破いたりして、紙の繊維の方向や柔らかさの中の抵抗感など、紙の触り心地を十分に感じさせる。(①)

・いろいろな形の紙を並べたり重ねたり組み合わせたりして、ビリーの形を思い出す。

*ビリーをつくる紙は、形への意識を高めるために黒か白に限定した。子どもたちがどちらかを選んで使うが、友だちと色違いの紙切れを交換して使ってもよい。白・黒を地色にすれば、かき足しのクレヨンの色が明るくはっきり見えるの

で、色に対する意識も高められると考える。(②)

(3) 形を思い浮かべたら、のりで貼り合わせ、目を入れたり、クレヨンでかき足したりする。

・色や大きさの違うシールを組み合わせることで表情のある目玉をつくっておき、児童が選んで貼れるようにする。クレヨンで目を直接かきたい子はそうさせてもよい。

*目をかき入れたとたん、紙切れが生き物に変わる。児童も感情移入しやすくなり、一気に発想が広がる。そこからさらに形を変えたり、クレヨンで色や模様をかき足したりと、活動も活発になる。生息する環境や食べ物、特徴や好きなことなどについて問いかけると、さらに想像が広がる。(③)

(4) ビリーと一緒にいる自分を想像し、台紙にビリーを貼って自分とまわりの様子をかく。

・「仲良しのビリーと自分がたのしくお散歩しているところを絵にしよう。」つくりながら考えたビリーの特徴などをもとに、自分との関わりや状況を想像し、表したい様子に合わせて台紙の色を選ぶ。ビリーを貼り、自分をかき込んだらまわりの様子をクレヨンでかく。

*ビリーと自分との関わりについて想像することで、身近な友だちとしての具体的なイメージをもつことができる。児童がたのしいお話をふくらませながらかいていけるように声をかける。(③)

3. おわりに

この題材はビリーをつくる活動と絵に表す活動の2次構成になっている。第1次だけでも三つの視点を網羅し、まとまりのある活動をすることはできるが、自分との関わりを考えさせることでさらに思いを広げたり、表現を深めたりすることができる。第2次を設定した。

児童は、この題材をとてたのしんでおり、ビリーと自分のお話や展示された友だちのビリーについて考えたことを、活動が終わってからたくさん話しに来てくれた。児童の心に根を下ろすことができたという点で、成功であったと言えると思う。今後も児童の心に響く題材を考えていきたい。(きぐち けいこ)



あふれる想い、私の視点

～ドローイングへの挑戦と動画による作品紹介～

埼玉大学教育学部附属中学校 安藤 栄信

1. はじめに

新学習指導要領によって整理された、「美術で育てるべき能力」に基づいた授業を効果的に実践していくことは、時間数の少ない美術科を担う美術教師の使命である。子どもを伸ばすためにある指導、そして評価について、「美術で育てるべき能力」という観点から再考しなければならないという考えのもとに本題材を実践した。

2. 題材について

本題材は、ドローイングを通して表現方法を思考・判断しながら主題をもって自己表現する活動と、表現した作品をデジタルカメラの動画撮影機能で撮影し、自他の動画を鑑賞する活動からなる第2学年の題材である。

ドローイングを、小学校での学びと中学校での学びの連続性を生かし、さらに発展させていく取り組みとして位置づけ、表現の多様性に気づき、自己と向き合いながら発想したことを形や色彩などで表現していくたのしさを味わわせるとともに、思考力・判断力・表現力などを高めていくことを目的とした。また相互鑑賞する活動においては、完成した自己の作品を動画で撮影し、生み出した主題や表現のよさ、おもしろさを、自己評価や相互評価をもとにしながら気づくようにし、個々の鑑賞の能力を高めていくことを目的とした。

このように思考・判断しながら表現したり鑑賞したりすることのたのしさを味わいつつ、造形的な創造活動の基礎的な能力を育てたいと考え、本題材に取り組んだ。

3. 授業の実際

(1) 第1時「おもいきり！ らくがき」

ドローイング作品を鑑賞し「おもいきり、ら

くがきしてみよう！」そんな提案で始まる授業。教室の前にはたくさんの描画材料(色鉛筆・クレヨン・油性ペン・カラーペン・水彩絵の具・マープリング用インク・墨汁など)。上質紙や画用紙に枚数の制限を設けない。「どんな描き方をしても、何を描いても何枚描いてもよい。」中学校2年の生徒が勢いよく道具に集まり、あっという間にさまざまな形や色彩が思い思いの方法で描かれていった。

(2) 第2時「実験！ 発見！ こんな描き方！」

新たな表現方法を模索するという目的をもたせ描く中での試行錯誤をした。パネルに貼ったりスクリーンに映したりした他者の表現から刺激を受け、生徒自身の思考・判断が活性化していくようにした。この試行錯誤する場面では、小学校段階での多様な描画方法の経験の源となり生かされていた。



(3) 第3時「あふれる想い…マイ・ドローイング！」

自己の内面を深く見つめ考えたことから、主題を生み出し、作品として描く。「今、この瞬間の自分の気持ち」を大きなテーマとし、一人一人が自分の表現に取り組んだ。これまでのドローイングを通じた表現学習をもとに、自分の表現意図に合う表現方法を工夫していった。生徒は主題に一番適した紙と道具、表現方法を選択して描いていく。最初は友だちとわいわい語りながら描いていた生

徒も、時間とともに自分の主題を表現することに集中していく。そこには表現することのたのしさを味わい、能力を発揮する生徒の姿があった。



(4) 第4時「私の視点…マイ・ドローイング！」

自分の作品の魅力を他者に伝えるために、デジタルカメラで動画を撮影した。まず生徒自身が発想した主題や表現のよさ、おもしろさに気づき、どのような構図や効果、ナレーションで撮影すればよいかを試行錯誤させる。その際、形や色彩、材料などの特徴をもとに、イメージをとらえるようにした。

この活動は、思考力・判断力・表現力などが一体となって発揮される学習活動であると考え。またナレーションを考え実践する活動は、〔共通事項〕を意識した言語活動そのものである。そして動画を撮影する活動は、生徒のナレーションからは積極的に自己の作品を評価する言葉が数多く聞かれ、自己評価を充実させる活動になっていた。



(5) 第5時「私の表現…今の気持ち」

生徒が前時に撮影した動画を学級全体で鑑賞した。他者の作品から表現の多様性を感じ取るとともに、主題や表現意図をどのように表現し、他者へ伝えようとしたのかを感じ合えるようにした。撮影された動画は1分前後のもので、生徒にとって動画を視聴することは生活に密着した行為なので、自然に集中して鑑賞することができた。

4. 子どもの想いを読み取る

「主題を生み出す」ことへの指導と評価にあたっては、生徒が「何を描きたいのか、何をつくりたいのか、どういう想いで表現しようとしているのか」を読み取り、教師がその主題をよく理解することが必要である。そのためには、生徒一人一人の作品の表現意図を読み取る方法を工夫しなければならない。子どもの作品に対する想いを読み取る方法にはさまざまな方法があり、作品カードなどの記述された文章に頼る部分が多いのではないだろうか。

本題材において動画を撮影することは、生徒一人一人の作品の表現意図を読み取る方法の工夫であり、指導と評価の手立てであると考えた。撮影された動画は生徒の作品を見つめる視点と同時に、生の声が記録されている。この動画は教師が「子どもの作品を見る」ことを再考する大きなきっかけになる。これは評価(指導)を「どんな能力を発揮したのか」という視点で改善していくことにつながると感じた。

5. 美術で育てるべき能力

美術だからこそできる造形表現(作品づくり)の必要性や大切さは変わらない。だが、時間数の少なさを嘆きつつ、これまでと変わることなく題材数を絞り、長時間かけて作品をつくらせることだけでは、美術教育に求められている「美術で育てるべき能力」の育成は難しいのではないだろうか。

3年間での115時間を見直し、題材を積極的に見直し、柔軟にバランス良く再構築していく努力が今の美術教師には求められていると、改めて実感した実践である。

(あんどろ ひでのぶ)

*参考文献：
三澤一実「自分をつくる美術教育」、『造形ジャーナル』Vol.56-1、開隆堂出版、2011、pp.10-11

*参考実践：
所沢市立林小学校5年生、「ボクの家にあそびにおいてよ」、星真弘教諭、所沢教育センター、2011.2.19(動画機能を活用した鑑賞活動及び自己評価の充実のための取り組み)

藤井達吉現代美術館と碧南市の美術教育

～藤井達吉の教えを子どもたちに～

碧南市藤井達吉現代美術館学芸員 土生 和彦

1. 藤井達吉を知っていますか

名古屋から南南東約30kmに位置する碧南市。古くから矢作川と衣浦湾の水運を利用して、三州瓦、醸造、鋳物などの産業が発展した地域です。



藤井達吉



藤井達吉「草花図」

藤井達吉は、明治14年(1881年)碧南に生まれた美術工芸家です。東京に出て高村光太郎や岸田劉生、富本憲吉ら多くの芸術家と交流を深め、吾楽会、フェウザン会、国民美術協会、装飾美術家協会、无型などのグループに名を連ねました。雑誌『主婦の友』に手芸制作法を執筆したほか、『美術工芸の手ほどき』など数多くの著作や論評も発表しています。また、官展に工芸部門を開設するよう運動するなど、日本の工芸を発展させるためにさまざまな努力をしました。

昭和を境に東京を離れた藤井は、郷土の美術工芸の発展に力を注ぎました。そのため中央の美術界からは次第に忘れ去られ現在に至ります。しかし、一貫して主張した「手作りの大切さ」「生活に密着した芸術としての工芸」「自然の美しさから学ぶ」ことは、私たちが藤井の存在とともに見直すべき考え方です。

碧南市藤井達吉現代美術館は、藤井達吉の顕彰という地元の篤い思いを受け、平成20年に開館しました。

2. 藤井達吉の精神をつなぐ教育活動

美術館が地元のできた結果、より専門的に藤井の足跡を伝えていくことができるようになりました。藤井の母校である棚尾小学校では、藤井の業

績を調べ、学芸会で発表をするなどの活動を長年行ってきましたが、今までは藤井の人物や作品に触れる授業が中心で、作品制作を通して藤井の思いに触れることはありませんでした。美術館ができたことでの交流をもったことで、美術館スタッフを出張講師として学校へ派遣し、図工の授業の中で藤井が手がけた継色紙や水墨、屏風絵を体験する機会が生まれたのです。作品は「碧南子ども造形展」に展示発表され、とても好評でした。



子どもたちの制作の様子

藤井達吉「継色紙」



子どもたちの作品

このほか美術館では、土日や夏休みなどの休日に地元の作家を講師に招き、子どもたちに造形活動を体験する「子どもワークショップ」や「親子ワークショップ」を行っています。また、子どもからお年寄りまで自由に作品の発表ができる「アンデパンダン展」を隔年で開催しています。こうした活動から、第二第三の藤井達吉が生まれることを願っています。

3. これからの課題

藤井達吉の創作活動は幅広く自由で、図工や美術で取り上げるには最適です。今はまだ漠然とした郷土作家の紹介として教育されている段階ですが、造形教材としての継色紙の位置づけと藤井達吉の美術教材としての役割をしっかりと研究していくことが必要でしょう。(はぶ かずひこ)

造形ピックアップ

佐賀を、そして日本を元気にする造形活動

佐賀大学文化教育学部附属小学校 富永 千晶

「地域とかかわり、いきいきと造形活動に挑む児童の育成」を研究テーマに、これまで地域の人・造形物・空間や場とのつながりを大切にしながら造形活動を展開してきました。

今回紹介するのは、今年で40回目となる「佐賀城下栄の国まつり」に手作り衣装と御輿で参加しようというプロジェクトです。



総合的な学習の時間と関連させて、街頭インタビューに出かけ、地元の方の思いを調査した結果、この「まつり」には、地元商店街の活性化、東日本へのエール、築城400年を迎えた佐賀城のお祝いという人々の思いが込められていることがつかめました。

そこで、佐賀城の鯨を御輿のデザインに取り入れ、パレードの衣装を大名行列風にすることにしました。自分たちがパレードに出場することで、「まつり」が盛り上がり、佐賀はもちろん日本が

元気になるように願いを込めました。この考えに賛同し、ともに活動して下さったのが、「鍋島三十六萬石大名行列まつり振興委員会」と佐賀大学文化教育学部美術工芸課程の学生有志による「佐賀芸術物語」です。

大名行列風の衣装ということで本物の袴から型紙をつくり、そこから人々を元気にしたいという願いを込めて色とりどりの衣装をつくりました。

御輿は、鯨の鱗に商店街や東日本を元気づけるためのメッセージを一人一人が書いて、大学生とともに完成させました。児童は、鱗の配色、段ボールの補強の仕方など、共同製作を通して多くのことを学ぶことができました。

本番の「まつり」では保護者や地域の方に喜んでもらい、みんな達成感に満ちあふれていました。

「生きる力」を育むために造形教育が担う役割は大きいです。今後もそのことを児童の輝く姿を通して地域に発信していきたくですし、児童にも造形活動と自分たちの生活が密接に関係していることを実感してほしいと考えています。(とみなが ちあき)



造形プラザ

○埼玉大学教育学部附属小学校
第79回小学校教育研究協議会

「自己を磨く児童を育てる授業の創造」

日時：2012年2月7日(火)、8日(水)
受付 12:30～、授業開始13:00～
会場：埼玉大学教育学部附属小学校
内容：公開授業、教科別分科会(図画工作は7日)
問い合わせ先：TEL 048-833-6291
ホームページ：http://www.fusho.saitama-u.ac.jp/

○第1回 墨アートフェスティバル2012
～墨アート講座～

「『墨』を使った『アート表現 墨アート』の体験」

日時：2012年2月11日(土)、18日(土)
受付 9:30～、10:00～16:00
会場：奈良県文化会館2F 集会室A/B
内容：墨アート講座、墨アートフェア、記念講演
問い合わせ先：TEL 0745-23-0795
ホームページ：http://www.cam.hi-ho.ne.jp/sumi-art/npo/

新学習指導要領
を読み解く

よくわかる
図画工作科
学習指導要領

好評
発売中

ビジュアル解説

授業への生かし方



■藤澤英昭／監修
■石賀直之 西村德行 三澤一実／共著
□B5判／96ページ(カラー)+資料16ページ付き
□定価 2,415円(本体2,300円)

豊富な作例
や活動例で
学習指導要領を解き明かす、これ
までにないわかりやすい解説書です。



移行期から役立ちます!



よくわかる
図画工作科
『評価』のしかた

新学習
指導要領
対応

佐々木達行／小林貴史 編著
■全3冊シリーズ(低学年編・中学年編・高学年編)
■B5判／96ページ・オールカラー
■定価 各2,415円(本体2,300円)

「目標と内容」をとらえた「授業づくり」で
子どもが育つ評価ができる

造形ジャーナル

Vol.56-3 (通巻413号)
定価120円(本体114円) 送料120円

平成23年11月20日印刷 平成23年11月25日発行(年3回発行) 編集兼発行人 山岸 忠雄
印刷所 株式会社平河工業社 〒162-0814 東京都新宿区新小川町3-9
発行所 開隆堂出版株式会社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1
☎(03)5684-6121(営業)、5684-6118(販売)、5684-6117(編集)／振替 00130-8-75296
http://www.kairyudo.co.jp/



開隆堂出版株式会社

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03(5684)6111

北海道支社 〒060-0061 札幌市中央区南一条西6丁目11番地 札幌北辰ビル8階 ☎011(231)0403
東北支社 〒983-0043 仙台市宮城野区萩野町1-11-1 萩野町Mビル2階 ☎022(782)8511
名古屋支社 〒464-0802 名古屋市中区星が丘元町14番地4号 星ヶ丘プラザビル6階 ☎052(789)1741
大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町2-10-16 ☎06(6531)5782
九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階 ☎092(733)0174